

## 地域ので未来の宝を育てる

弘本由香里（大阪ガスエネルギー・文化研究所 客員研究員）

### 大人になる困難

子どもや親子関係をめぐる悲惨な事件が相次いでいる。なぜこれほどまでに、子どもの自立、大人になることの困難性が露見してきているだろう。

考えてみれば、子育てに費やす時間と、その現場となる家庭や地域社会の存在こそ、人類特有の産物といっているものである。直立二足歩行と引き換えに、極めて未熟な状態で子どもを出産することとなったために、長期に渡って親や社会が子どもを保育するシステムを構築せざるを得なかったためだといわれる。未熟な子どもを一人前に育て上げるために、愛情や家族や地域社会のシステムをはじめ、多種多様な社会規範や生活文化を発明してきたといっても過言ではないだろう。

子どもの成長を支える仕組みが、いかに丁寧に地域社会に組み込まれていたかは、各地に残る民俗儀礼や風習や昔話等にもうかがい知ることができる。あらゆる限りの想像力・創造力を駆使して、先人たちは子どもの成長と自立という人類最古で最大の課題に向き合ってきたのだろう。

例えば、かつて日本各地に「若衆宿」という成人前の共同生活のシステムが分布していた。同様のシステムは、世界各地にも存在していたといわれる。青少年

が起居を共にしながら、一人前の成人として地域社会に加わっていくための準備期を過ごす、通過儀礼の一種である。日本では、三重県鳥羽市の答志島に、若衆宿としての「寝屋子」と呼ばれるシステムが残っている。

「若衆宿」に限らず、世界各地にはそれぞれさまざまな形で、子どもが成長し一人前の成人となって地域社会に加入するための、通過儀礼が存在してきた。そのプロセスを象徴化した昔話も数多く語り伝えられてきている。こうした昔話の構造は、通過儀礼の構造と同様で、まず、それまで子どもとして守られていた日常空間からいったん離脱した後に、いくつかの試練を乗り越えて、成長した大人となって地域社会に帰還するというストーリー展開を持っている。このような儀礼やストーリーを一定の地域社会の中で、世代を超えて共有継承していくなかで、子どもは心身ともに大人になる意味や態度を学んでいった。

しかし、地域社会に根ざした通過儀礼や昔話が、名実ともに機能していたのは、前近代的な社会においてである。前近代から近代への社会変革は、人間の生き方にも大きな変化を促し、都市化・工業化の進展とともに、地域共同体に根ざした通過儀礼は意味をなさなくなっていく。初期産業化社会には、子ども期と大

人期の間に、子ども以上一人前未満のモラトリアム期としての青年期が登場し、高度産業化社会になると大人期の後半における中年期・高齢期が重く膨らんでくる。核家族化が進み、子育て後のエンブティ・ネスト（空の巣）と妻たちの思秋期が話題となった後、高齢化・小規模化の進む家族の中で起きている問題は、青年期から中年期・高齢期に至る、親子密着とその密着が引き起こす子どもの自立疎外である。

近代化が結果としてもたらした、地域社会と生活との乖離、多世代間の価値の共有やコミュニケーションの断絶、生命の連続性の感覚の希薄化、子ども・大人相互の成熟困難性。それらが今、改めて人類最古の子どもの成長と自立という課題に向き合い直すことを私たち現代人に迫り、そのための社会システムを再構築し、生活文化を創造していく必要性を、多くの痛みや不安とともに、問いかけてきている。前近代社会とは異なる現代社会において、どのようにこの問いに向き合い解決方法を探っていくべきか。そのために、まず地域社会が子どもの成長にとってどのような意味を持つものであるか、再確認しておく必要があるだろう。

## 子どもにとっての地域社会

濱名陽子氏の共著『創造的コミュニティのデザイン』（有斐閣、2004年）の中から、子どもにとっての地域社会の意味について、住田正樹氏の整理（『地域社会と教育』（九州大学出版会、2001年））に基づいて紹介された部分を以下に引用しておきたい。

《まず第1に、子どもは地域社会において、他人性の存在を経験するということである。他人との関連で、ないしは他人のなかに自己を発見していくことから、

子どもの社会化は始まる。

第2に、他人との対面的交渉において、子どもは独立の主体として交渉せねばならず、行動の自己決定を絶えず要求されるということがある。

第3に、他人との関係のなかには、承認、確認、敬意といった肯定的関係ばかりでなく、対立、無視、非難、拒絶といった否定的関係も含まれる。

第4に、他人との交渉の中で、他人の表情や言動からその人のパーソナリティ・イメージを構成し、それに基づいて他人の動機を理解しなければならず、その人に対する対処の仕方を学ぶまでは、失望、拒絶、軽蔑などを経験するが、そうした経験によって他人に対する理解力や共感性を培い、他人への配慮能力を形成していくといえる。

第5に、子どもは同一地域に居住するさまざまな人との接触によって、その人たちの生活経験や生活様式あるいは価値を感覚的に取得していくというように、生活感覚の取得が行われる。》

濱名氏・住田氏が上記の著書で指摘するとおり、地域には、世代も国籍も職業もさまざまな立場の人々が暮らしており、子どもたちは、日常生活を通して、こうした社会の多様性に触れる中で、家庭や学校の中だけでは学びとれない、他者と相互に関係しながら生きていく態度を形成していくことになる。

しかし、いざ現在の子どもたちの生活行動・生活範囲に目を向けてみると、地域社会そのものの弱体化や、遊びを始めとする子どもの生活自体の変化や、子どもを巻き込む犯罪の多発などを背景に、地域社会と子どもの関係はますます希薄化しているといえる。子どもは家庭での親対子という上下関係、学校や塾での先生

対生徒という上下関係に代表される、極めて単一の間関係の中での成長を余儀なくされている。そのため、異なる価値観に対する感受性や他者と対話する姿勢など、現代社会の中でいっそう重要性を増す社会的能力を身につける機会を得にくい状況に置かれている。こうした関係不全をいかなる工夫で乗り越え、方向転換を促していくか、市民・地域社会の知恵が試されている時ともいえるだろう。

### 学社融合からのまちづくり

地域と子どもをめぐる関係不全に対して、学校サイドから一石を投じた例が、千葉県習志野市の小学校校長の宮崎稔氏らが進めてきた「学社融合」の取り組みである。一昨年（2003年）秋、大阪市で開催された大阪生涯学習フェスティバルにおける、宮崎氏の発表内容の一部を簡単に紹介したい（注1）。

《コミュニケーションが疎遠になった今、子どもから高齢者まですべての人がやさしく支え合うことができるという「人間体験」が基調になっているのが学社融合》だと、宮崎氏は定義している。

学社融合の先例となった秋津小学校・秋津地域では、次のような取り組みが育っている。「授業の合間の休憩時間や放課後の地域の子どもと地域の大人とのふれあい」、「生活科授業等をきっかけとした、地域と子どもたちの生活の継続的なつながり」、「PTA会員を軸とする地域の大人たちによる無償の、校内の飼育小屋づくりや余裕教室の改造による図書館づくり」、「中・高生から高齢者まで年間1万3千人の学校利用。1年365日、朝9時から夜9時までの学校開放と自主管理」、「休日や長期休み中、地域の人や子どもたちによる、

校内の飼育動物の餌やりや植物への水やり」など、軽やかでかつ確かな融合ぶりに率直な驚きを覚える。

こうした取り組みを通して、子どもたちは親や教師以外の大人たちの価値観や生き方にふれ心開かれ、不登校の減少効果も生まれているという。子どもたちだけでなく、学校を訪れる大人たちの側にも大きな効果が生まれている。高齢者や現役世代の大人たちは、地域でともに生きる実感や希望を得、子育て中の母親たちは相談相手を得、中高生たちは気軽に集まりスポーツや語り合いのできる貴重な居場所を得ているというのである。

その実践現場から生まれ、関係者が共有してきた理念は実に示唆に富むものである。例えば、「子どもたちにとって夢となるような大人の姿、わくわくしながら楽しんでいる大人の姿を見せることこそが大切である」、「ほんの一握りのよそ者である教師が、地域と隔離された場で子どもの育ちの全権を握っていることに対して、地域は地域に育つ子どもをどうしたいのか、住民自身で考え行動することが大切である」、「原風景が人間形成に及ぼす影響は大きいので、子どもから大人って素晴らしいな」、「地域っていいなあ」と感じてもらえるように、「責任追及型コミュニティではなく、地域ぐるみで問題解決型コミュニティに」など、学校からの発信を契機に、まちづくりへの展開の中で、子どもたちの育ちの環境が涵養されていく様子が、実感として伝わってくるものである。

### 学校・家庭・地域をつなぐNPO

学校と家庭・地域を結び取り組みで注目されるのが、兵庫県西宮市にある「NPO法人子ども環境活動支援

協会」(以下略称、LEAF)である(注2)。環境学習を通じた持続可能な地域社会の構築をミッションとして、子どもたちの自主的な環境活動支援事業を展開している。



小学校1・2年生用のエコカード  
「2011年・地球ウォッチングクラブに  
しのみや」(西宮市/LEAF)



小学校6年間を単位とした環境学習カリキュラムのしくみ(西宮市/LEAF)

LEAFの活動の特徴は、地域に根ざした学習の仕組みを組み立てる運営方針にある。根底には、知識を提供するだけの環境教育では、結局自分の暮らしを見つめ直す力や課題解決行動につながらないという痛切な問題認識がある。学校で学んだ知識や体験が、子ど

もたちの家庭や地域生活の中にしっかりとつながって  
いなければ、子どもたちの知識や体験は肉体化されて  
いかない。そればかりか、逆に無責任な大人や学校や  
地域社会に対する子どもたちの不信感を増大させてし  
まう恐れさえ孕んでしまう。子どもたちが主体的に地  
域社会の課題に向き合い、生きていく力を育むため  
には、子どもたちの生活場面全体に関わるさまざまな立  
場の大人たちが、暮らしの折節で子どもたちの学びの  
瞬間や過程に寄り添う関係があること。学びと暮らし  
が連続的に面的な広がりを見せる、地域のあり方が志  
向されている。

地域に根ざすという意味において、LEAFが重視  
しているのが「センス・オブ・プレイス」という考え  
方である。「場所の意味」や「場所に対する感性」を育  
むこと。地域の自然環境はもちろん、生活文化や産業  
活動まで含む地域の歴史や環境特性が、その地域に生  
きる自分自身の暮らしにつながっているのだというこ  
とに想像を巡らし、対話を繰り返していくと大きな  
価値を見出している。こうして培われていく感受性は、  
狭義の環境問題に留まらず、人権や平和、民主主義、  
福祉、健康、雇用等々、社会のあらゆる問題への想像  
力につながるものであり、問題の本質を把握する力や、  
解決への行動力・創造力へと通じていくことが期待さ  
れている。

具体的に、学校と家庭・地域をつなぐ全市的な活動  
システムとして、西宮市とLEAFが協働で取組んで  
いるのが、環境学習事業「2011年・地球ウォッチ  
ングクラブ・にしのみや」(EWC)である。市内の全  
小学生約24,000人を対象に「エコカード」を配  
布し、同時に学校の先生や地域の商店主、公共施設の

関係者、子ども会やボーイスカウト等のリーダーを始め、大人約1,500人に「エコスタンプ」を配布。環境学習や活動に参加すると「エコカード」に「エコスタンプ」を押してもらうことができる。子どもたちが自主的・継続的・総合的に環境活動に関わることのできる仕組みを、子どもたちをとりまく生活領域全体で実現できるよう、カードとスタンプを媒介に、子どもたちの気づきや大人と子どものコミュニケーションを紡いでいくという発想である。スタンプが一定数集まると「アースレンジャー認定証」が発行されるほか、小学校1・2年生では「アースレンジャーファミリー表章制度（家族単位の活動）」、3・4年生では「エコメッセンジャー活動（クラス単位でFM放送に出演）」、5・6年生では「エコ・トレード活動（クラス単位でエコアクションのための活動資金の活用）」で家族・地域・社会につながる魅力的な仕掛けも用意されている。

エコカードを使った学びの仕組みを基盤にしながら、市内の多くの小学校でLEAFとPTA共同の環境学習の企画運営等も広がっている。さらに、小学校6年間の環境学習プログラム（体系的・継続的な学習支援のしくみづくり）や、企業・学校・NPOによる環境学習プログラムの開発などにも取り組んでいる。例えば、西宮ならではの酒造会社とピン製造会社の協力を得て実現したプログラムでは、子どもたちはピンの誕生（金型製造）のプロセスから商品としての流通・回収・再生・廃棄まで、モノの命の全プロセスとそこに関わるたくさんの大人たちの仕事にふれる。その体験は、子どもたちの柔らかな感性を大きく揺さぶる。決してリサイクルやリユースの知識の吸収に止まるものなどではなく、ピン1本をつくるためにどれだけの人

の知恵や力やエネルギーが注がれているか、モノの命の尊さ・重さに出会い、消費のほんの一端にだけ関わる自分の存在を相対的に感じ取り、気づきを得るのである。

LEAFはNPOとしての特性を活かして、行政や学校が苦手とする機能を担い、多様な主体を学びの場にコーディネートし、ネットワークし、プログラムの開発と運営をサポートする役割を果たしている。学校・家庭・地域をつなぐ学びの仕組みづくりによって、持続可能な地域社会を目指すLEAFの実践は、現代の地域社会における子どもの育ちを支えるために、つなぎ手としてのNPOが果たしうる可能性を物語っている。

## エコミュージアムによる地域の学び

地域固有の自然・歴史・文化・産業等の環境特性を「エコミュージアム」という学びの舞台として活かしていく道もある。そこでも、子どもたちは重要な学びの主体である。

そもそもエコミュージアムの考え方は、1970年代初頭にフランスで提唱され、発祥は1960年代後半、パリを中心とした中央集権型の文化政策に対抗する、地方文化の再評価と地域経済の振興策の検討に遡ることができる。地域発のまちづくりと連動した、オルタナティブなミュージアム運動として各地に広がっている。エコミュージアムは、地域の大人と子どもがともに学ぶ場であり、それぞれの地域の環境特性とその歴史を、その地に生きてきた人々の暮らしとの関わりの中で、世代を超えて体験的に理解・継承し、地域に対する誇りと活力を回復していこうという目的に添ってマネジ

メントされている。

エコミュージアムを成立させるのは、「博物館活動」「地域遺産の現地保存・活用」「住民参加」の三つの機能の連携である。それらの機能を効果的に展開していくフィールドとして、テリトリー（文化領域）が設定され、その中心にコア・ミュージアムが設けられ、地域内で保存・活用される自然環境や歴史遺産や産業遺産等とコア・ミュージアムが、ディスカバリー・トレイル（発見の小径）でネットワークされている。

こうした活動が地域に根付いていくためにも、地域住民自体がその活動の担い手となることは必須要素である。同時に、資料の収集・保存から、調査・研究、普及・啓発にわたる、良質な博物館活動を核としながら、エコミュージアムならではのフィールドを活用した参加・体験型のプログラムをコーディネートするコア・ミュージアムの役割は欠くことのできないものである。



地中海森林研究所付属の  
エコミュージアムの一角  
(フランス)



案内者が持つ質問付きの  
ガイドブックを頼りに森  
を巡る

筆者が昨年訪ねた、南フランスの地中海森林研究所付属のエコミュージアムでは、地中海沿岸特有の植物・土壌・気候と、そこから生まれた木の生活文化まで、地中海エコシステムのポイントを体験的に学べるよう、「エコロジー」「地域の職業」「森の番人の仕事」

「植物の豊かさ」「動物の隠された生活」を切り口にした質問を頼りに、五感をフルに生かして森の中を巡り、自ら答えを感じとっていく。決して知識としての答えが張り出されているわけではないところに特徴がある。

さまざまな工夫を凝らして、地域の環境・文化特性を体験的に伝えること、地域を知ろうとする感性を開拓していくこと、地域における教育システムとしてのミュージアムマネジメントが実践されている。地域に根ざした、博物館活動、教育・研究機関の活動の新たなビジョンを指し示してくれている事例ともいえるだろう。

## おわりに

以上、簡単ではあるが、学校から、NPOから、博物館活動から、地域のまちづくりと一体で、子どもの育ちを支える意味と可能性について概観してみた。いずれの例にも共通しているのは、「多様な立場の人間に触れることのできる場をつくること」「空間的にも時間的にも地域と自分の暮らしの連続性を感じること」「地域の中で分断された知恵や情報や力をつなぎ直していくこと」である。そこに、地域の教育力再生の鍵がありそうだ。

(注1) 宮崎稔氏「学校からの発信で支え合いのまちづくり—学校と地域のかろやかな融合—」  
(2003年11月15日 第12回大阪生涯学習フェスティバル資料)

(注2) こども環境活動支援協会の事業の詳細は、  
[URL://http://leaf.or.jp](http://leaf.or.jp) 参照

(なお、筆者は理事の一人である)